

昭和は遠くなりけり

作詞・作曲家 高橋育郎

第1話 その1

二歳の思い出

二歳といえば、はっきり物心がついたかどうかの境目だ。耕太はかすかに覚えていることがある。稲付でのことだ。以下、私を耕太とします。幼いころ「いこーちゃん」と呼ばれました。それを聞いた弟は「こーちゃん」と呼びました。ところで、父は私の名を「太一」にしようとしたそうです。そこで、「こー」と「た」を結んで「こーた」とし、「こう」を耕としました。山田耕祐の耕です。人生を豊かにしていくため、常に耕していこうという意味もこめました。ある晩のこと私は父に抱かれて、ふらっと散歩に出た。近くに幅4メートルほどの道路があって、そこに小さな公園があり、ブランコと滑り台があった。その公園の右方向に交番があった。交番の軒先に直径二十センチほどの電球が付いていて、何故か赤色だった。この赤色灯が交番のいわば目印だったのだろう。耕太には何故かこの赤色灯が印象的で記憶された。そこから一軒おいた先に門構えのあるお屋敷風の家があって、門柱二本は切り株が残った樹木だった。その切り株のごつごつ感が、どうにも不気味だった。父は耕太が怖がるのを面白がって近寄って行っては顔を付けるようにした。当然ながら私は「いやだよー」と泣き叫ぶのだ。人通りはまったくなく静まりかえっていた。

志茂町の思い出

3～4歳の志茂町は、物心がついたところで、記憶は俄然多くなった。とにかく赤いゴム長靴がお気に入り、どこへ行くにもいつも履いていた。耕太のシンボルマークだった。それが、どう迷子と結びつくのか。耕太は生まれながらに音楽、とりわけ歌が好きだった。当時、耳にする音楽と云えばチンドン屋だった。チンドン屋の音が聞こえると一目散に駆けつけるのだ。近づいてくるのをわくわくして迎え、通り過ぎるのと同時に後をつけるのだ。後先のことは考えない向こう見ずだから、引き返そうとしたときは帰り道が分からず泣きだす。すると誰かしらが気づいて「また赤いゴム長靴の子だ」といって家まで送ってくれる。シンボルマークをもった迷子の子で、知れ渡っていたのだ。ところがある日、事件がおきた。その日はチンドン屋いつもより遠くまでいった。やがて日が暮れてチンドン屋は肩の楽器など外したかと思うと足早に去って行った。耕太は一人原っぱの真ん中に取り残された。日が落ちてきて暗くなるのは早い。心細さが迫ってきて、泣くほかない。泣き声は大きくなる一方だ。そのうち原っぱから見える二件ほどが灯りをともした。すると人影が見えた。耕太の泣き声に気づいたようだ。二人の人影が近づいてきた。ほっとしたところで「坊やのおうちはどこ」ときかれた。私は「あっち」と来た方向を指さした。二人は私の指さす方へ耕太を連れて歩き出した。よく辛抱強く歩いてくれたものだ。そのうち見覚えのある風景がみえてきて、「ボクのうちはあのへんだよ。もう大丈夫」といって「どうもありがとう」とやっというって、かけるようにして家にとびこんだ。 (作詞・作曲家 高橋育郎)

第1話 その2

もう一つ迷子の話

ある秋の日の夕方、夕食が終わったところで父と母は赤羽駅近くへ買い物に行くことになった。

耕太は一足先に門を出た。そこで待っていたが、せっかちな私は待ちきれず、一足先に歩きだしてしまっただけ。気が付いてみると、いつもと違うところを歩いていた。あたりはすっかり暗くなっていて、急に心細くなってきた。とある一軒の家の玄関先に立っていた。灯りが漏れていて、中から三味線の音が聞こえていた。一抹のうら寂しさがあった。

私は今来た道に戻り歩き始めると、そこに両親が現れた。耕太はとびこむように駆け寄った。向こう見ずの耕太は門のカギを閉めていても、塀の隙間から潜り抜けてしまう。ある日、父は板を買ってきて、隙間を塞いでいた。

童謡とボク

耕太は生まれつきの歌好きだった。

「好きこそものの・・・」の例えどおり、覚えるのも早く、よく歌っていた。隣のおばさんは、元小学校の音楽の先生だった。このころは、どこへ通っているかは知らなかったが、よく出かけていた。家に帰ると耕太を迎えにきた。そしてオルガンを弾いて、私に歌わせた。

よく覚えているのは「アメフリ」だ。「雨あめ降りふれ母さんが 蛇の目でお迎え うれしいな」それから「へいたいさん」で「てっぽうかついだ へいたいさん あしなみそろえてあるいてる とっこ とっこ あるいてる へいたいさんは だいすきだ」

時代はシナ事変から日中戦争さなかだった。昭和11年に2・26事件が起きて、世の中はきな臭くなっていた。いつ終わるかしない。しかし、戦争のことは子供には海の向こうの事としか思えないでいた。

近所の友だち

家の前に幅6メートルほどの道があり、両サイドに家屋が片側7軒 両側で14件ほどが立ち並び、これが町内である。そこには子供が不思議なほど少ない。耕太の遊び相手になる子は女の子が3人だった。裏手になる家には姉と妹がいて、妹が私と同じ年だった。道の向こう側には同じ年頃の女の子が二人いた。だから遊び友達は女の子3人だった。ところで私のお気に入りには裏の子だった。

何かというと遊びに行った。叔父さんも叔母さんもいい人で、私を歓迎してくれた。遊びはボールを廊下で転がしっこする、いたって簡単なものが多かった。姉さんを交えて他の遊びをしたが、何をあそんだか、そのあたりははっきりしない。折り紙や塗り絵をやったことがあって少し思い出す。

もう一人は天理教の拝み屋のうちだった。遊びには行ったが、どんな遊びをしたかは漠然としている。もう一人はお転婆の気の強い子で、二人になることは、つい敬遠してしまった。

第1話 その3

水道ガスはあれども風呂はなし

水道とガスは入ったばかりだった。稲付では両方ともなかったのだ。

流し台で水が流れ落ちるのが面白くて、皿洗いの手伝いをした。

風呂屋は近かったが、道の便がなくて遠回りした。雰囲気はなんとなく覚えている程度で、はっきりとは記憶していない。

乳母車

買い物というと、赤羽駅のほうへ行った。近くには大きなお店がなかったからだ。買い物には乳母車を使い、耕太は乗せてもらったのを覚えている。自転車は一般には普及していなかった。

ペットはいなかった。

いまや犬と猫は大変な数だ。ペットブームと言われて久しい。

しかし、耕太の知る限り、ここ東京下町にペットは無縁だった。

猫は見かけたことがあったが、犬はいなかったのだ。この傾向は赤羽でもそうだった。ただ、犬にまつわる話がひとつある。

2年生の春のある日、どこかのおじさんが、仔犬をつれてやってきた。子供たちが5人ほど取り囲んだ。おじさんは「だれかこの犬もらってくれないか」といった。耕太はほしかったので、家にもどって母にいうと「うちでは猫がいるからダメ」といった。

結局だれももらおう子はいなかった。おじさんは、しらないところで犬を放して帰ってしまった。そして何日かすると、その犬が噛みつき犬になってしまった。そして、私も追いかけるはめになった。全力で駆けて家の玄関に飛び込み、あと一歩のところまで逃げ切った。

引っ越し

志茂から赤羽への引っ越しはトラックだった。町内には道が狭くて入れず、入り口のところで止まった。京浜東北線電車の高架に沿った道だ。なぜか子供たちが5~6人で待ち受けていた。耕太は怪訝な顔をしていたが、そんなことは構わず「名前は」と聞いた。「耕太」と答えると、「そう仲良くしよう」というと、すかさず荷物を持って、耕太の家をめざしていった。100メートル強の距離になる。大人たちは一瞬茫然と見送った。子供が持てる荷物を子供たちが受け持ったのだ。こうして引っ越したその日から、みんなと仲良しになった。

袋小路と隣組

東京の下町には袋小路があった。ここもそのいい例だ。どぶ川があって、橋が入り口になる。あとは、トラックがとまったあたりのどぶ川にそった道からはいる。中へ入ると道は行きづまりで抜け道はない。袋小路には2、4、5軒が立ち並んでいる。それを管理しているのが大家さんだ。賃貸住宅の貸付元である。翌15年になると戦時体制の隣組になった。ラジオからは「とんとんとんからりと隣組 障子をあげれば顔なじみ 回してちょうだい回覧板 知らせられたり知らせたり」の歌が放送されていた。隣組は一致団結の大切さを教えていた。

第2話 赤羽町編（王子区 いまは北区）その1

子供は風の子 仲良し子供はよく遊ぶ

「子供は風の子」とよく言われ、子供は外に出てみんなと良く遊ぶものとされていた。親は子供が外で元気に遊んでいれば目を細めていた。子供は遊びの天才だ。遊び方はいくつもあって、その日その時によって好きなように遊んだ。

袋小路の中は、いい遊び場所だ。自動車も自転車なかった。大きな雑貨商があって、荷物の運搬は馬だった。馬が荷車を引いた。

子供たちは遊びを始めるときは「〇〇するものよっといで」と「〇〇するものこの指とまれ」と呼び掛ける。たいてい年長がリーダー役になる。簡単で代表的な遊びは「鬼ごっこ」と「かくれんぼ」だ。これは何も道具を使わない。「鬼ごっこ」では鬼が誰かを決める。そこで「じゃんけんぽん、あいこでしょ」とじゃんけんで鬼を決める。「うまとび」と「うまのり」「かけくらべ」「めかくし」「おしくらまんじゅう」も道具はいらない。形は幾通りか工夫しながら変える。

道具はいたってかんたんなもの。まずは「ローセキ」だ。

ローセキは地面に絵や字が書ける。子供たちは、これで地面にいろいろ書く。それを遊びのゲームに使うのだ。例えば輪を並べて書いて、片足と両足を交互にぴよんぴよん跳んでいく。ただ跳ぶだけでは面白くないから片足立ちで、何かを拾ったり、いろいろ考える。宝取りとか日曜表とか、駆けたり、跳びはねたり、いろいろと遊ぶのだ。

次は縄だ。まずは縄跳び。一人でやるものと複数人でやるものがあり、「大波小波 ぐるりとまわして 猫の目」だ。縄跳びはいまでもよくやられている。また長いものであれば綱引きだ。女の子はゴムひもをつかったのゴム段がある。男の子はただ見る側になる。ゴム段とは長さ2・3メートルのゴム紐の両サイドを、女の子が立って持つ。始めは50センチくらいの高さにして、そこを数人の女の子が、順番に飛びこすのだ。そして、高さを徐々に上げていき、最期は背の高さまでにする。そうするとまともには跳べないので、逆立ちして足の先をゴムにかけて、そのゴムを地面まで引き延ばして越してしまうのだ。そんな芸当をして見せるのだ。

危険を伴うのはチャンバラだ。チャンバラ映画（かつどう）を見てくると、早速はじまるのがチャンバラごっこだ。棒を剣にみたくて振りかざして相手を斬る。ケガをしないように寸前で力を抜く。あまり真剣になって、つい打ってしまうことがある。顔と頭は狙わない。あとは突きをしない。これが鉄則だ。敏捷性、瞬発力を鍛えるのだ。

夕方、日が暮れるまでは遊びの時間だ。サトウハチローの歌に「夕方のおかあさん」というがある。お母さんが外に出て「ご飯だよー」と呼ぶのだ。そんな風景が日常だった。日の長いころは、夕食をすませてから、また遊びに出る。暗くなると星がでる。誰かが星を指さして「いちばんぼーしみーつけたー」と大きな声でいう。二番目の子は応えるように「にーばんぼーしみーつけたー」と応じる。こうして子供たちの声がこだまするのだ。

第2話 赤羽町編（王子区 いまは北区）その2

わらべうたと童謡

子供たちはわらべうたで遊んでいた。わらべ歌は主に江戸時代に作者不明で発生し、今日に受け継がれている。簡単なのは「めかくし」だ。鬼は手拭いで目をかくす。逃げる方は「鬼さんこちら 手の鳴る方へ」をくりかえしながら、捕まらないように逃げる。

また、よく遊んだのは「かごめかごめ」「花いちもんめ」「通りゃんせ」「坊さん坊さん」「いもむしごろごろ」「あのこがほしい」「いちかけにかけて」だ。それから「あんたがたどこさ」は戦後中学生になってから女の子が歌うようになった。

家の中でよくやったのは「ずいずいずっころばし」「せっせっせ」「にらめっこしましょ あっぷっぷ」「上がり目下がり目」「だるまさん」「あぶくたあつた煮えたつた」で、女の子はお手玉で「いちれつ談判破裂して日露戦争はじまった」「一羽のカラス」「一は尾張の一宮、二は日光東照宮・・・」をやっていた。なぜか、お手玉は女の子の領分だった。でも、戦時中は男の子もやりましたよ。

原っぱへ行って帰り道では「夕焼け小焼け」「おててつないで」を歌った。

わらべうたはいわば遊び歌で、一休みしたときは童謡をうたった。よく歌ったのは、昔ばなし歌で「桃太郎」「花咲爺さん」「一寸法師」「浦島太郎」「金太郎」「兎と亀」だった。「一寸法師」は父とお風呂に入るとよく父がよく歌った。望みを大きくして育ていけという親の願いだったかも知れない。

子守歌は、なぜか「江戸子守歌」(ねんねんころりよ おころりよ) だった。当時は「ねえや」とか「ばあや」がいて、赤んぼをおぶって外に出て、この子守唄をうたっていた。もちろん赤んぼの姉さんも歌っていた。耕太が1年生の時、弟がうまれた。母から子守を頼まれ外へおぶって出たのだが、重くて10分もたつと我慢できず家に戻ってしまった。それから「いろはにこんぺいとう」「さよなら三角」。

童謡では「証城寺の狸ばやし」「どんぐりころころ」「雨降りお月」「青い目の人形」「赤い靴」「雀の学校」「汽車」(今は山中) など。

季節の歌では、春は「うれしいひな祭り」、夏は「ほっほ蛍こい」、秋は「どんぐりころころ」、冬は「お正月」が定番だ。「どんぐりころころ」の思い出は、一年生になって隣組が結成されると、常会が行われるようになった。ある日、耕太は三輪車で遊ぼうとしたとき、近所の子が「耕ちゃん 常会でよんでいるよ」と迎えに来た。常会は拝み屋が例会場になっていた。何事か行ってみると、おばさんたちが20人ほど座敷に集まっていた。「きょうは常会が早く終わったので、耕ちゃんに何か歌を歌ってもらいたいの」と言われた。

拝み屋は、一段高く段があって、ここがステージ替わりだ。耕太は段に上がると「それでは『どんぐりころころ』を歌います」といって歌った。耕太の歌好きは知られていた。当時の庶民の家はガラス戸がなく、座敷の境は障子で、廊下は雨戸だけ。だから雨戸を明ければ、障子だけだから、常にあけっぱなしで物音が外へ漏れやすい。耕太は、しょっちゅう大声で歌っていたのだ。というわけで耕太は呼ばれた。人前で歌う初めての経験をした。

戦時歌謡はラジオから聞こえることが多くなり、自然に覚えた。いつも一人で歌っていた。おもしろかったのは、志茂にいたとき、出前のあんちゃんが自転車に乗って「上海だより(拝啓ご無沙汰しましたが)」を歌っていて、聴き覚えてしまった。

赤羽では「愛国行進曲」「愛馬進軍歌」「紀元二千六百年」「軍艦行進曲」「隣組」「暁に祈る」「日の丸行進曲」「露営の歌」を歌った。

ラジオといえば「国民歌謡」が始まった。「椰子の実」は、メロディーだけ覚えた。ラジオは箆筒の上に置かれていた。だから子供には手が届かない。自分でスイッチを入れて聞くことなどなかった。

第2話 赤羽町編(王子区 いまは北区) その3

水道とガス

志茂では、水道はあってガスは1年ほどたって引かれた。稲付では両方ともなかったのだ。2軒共用の井戸があって、生活は大変だった。

赤羽に来たら勿論、水道ガス共あって、時代の進化を知った。流し台に蛇口が一つあった。ガスコンロも一つあった。栓をひねってマッチで火をつけるのだ。風呂場もあってホースで水を入れることが出来た。ただ、相変わらず薪を燃やす。耕太はよく風呂焚きやった。風呂場はトタン葺きで、洗い場はすのこだった。

銭湯にはよく行った。銭湯の壁には、やはり富士山と海が描かれていた。

耕太の家

典型的庶民の家だから木造平屋の瓦葺きだ。引手の門を入ると正面が玄関で靴脱ぎから上がると二畳の間。左側が耕太の部屋6畳で、台所、風呂につながり、右手が6畳の居間だ。その右が6畳の床の間付き寝室。ふすま続きが8畳の客間だ。玄関の脇になる。客間と寝室サイド三

尺幅の廊下がかぎ型に続いていて、寝室のそばに便所大と小がある。庭がかぎ型にめぐっている。庭には杉の木が一本にざくろとアジサイが大きく枝を張り、小さめのビワ。そして門の傍らに桜が枝を張っていた。父は畑にミツバとトマトにナスを育て収穫した。

正月風景

大陸（支那）では、慢性化したように戦争が続いていた。昭和 15 年、国内はまだおだやかな雰囲気があった。しかし国民徴用令が出て、出征兵士の出いく情景を見るようになった。正月はいつものように迎えられる。

正月と云えば、先ずは餅だが、両親の実家から慣例的に送られてくる。海苔におかずは数の子だが、鱈子が珍しくそえられた。

朝は雑煮から始まる。今に変わらない。家の畑でとれた三つ葉はおいしい。お供えは神棚と床の間に鏡餅。仏さまは父の両親の位牌が桐の箱に収められた簡単なもの。ここにも餅などお供えをする。

卓袱台を囲む。酒は飲めない父だから、お屠蘇は形ばかりに一口に口に含むだけ。傍らに小さな炬燵と火鉢が置いてあった。炭火だ。炭櫃に炭が何本かある。火力が弱まると炭を火箸でつかんで足してやる。炭火が絶えないよう絶えず気を使っている。火鉢は暮れに新しい大きなもの買い替えた。

初詣は氏神の八幡様だ。家から見える丘の上だ。歩いて 5 分くらいの京浜東北線の踏切を渡るとすぐに鳥居があって、100 メートルほどの参道から 50 段ほどの石段を登っていくと本殿がある。普段は遊び場にもなっていて、見慣れた景観だ。右手にお神楽の舞台がありすさのうの命と八岐大蛇（やまたのおろち）の舞、おかめひょっとこの踊がある。境内は例の通り満杯の賑わいだ。お札とお守りを買う。参道の両サイドは出店がひしめく。祭禮の日と同じ状況だ。綿あめが楽しみだ。母はあまり買い食いをさせたがらない。あとは耕太の好きな奴胤をかう。耕太は着物姿になった。正月は誰もが着物だ。

女性は日ごろから着物で、洋装の姿はめったにみたことがない。

台所はお勝手といって、ここで女性は前掛けをする。

翌年には、「パーマメントはやめましょう」という歌が出た。贅沢は敵と言われ、節約時代になった。

ラジオでは柳家金語楼の「兵隊落語」が大当たりしていた。

第 2 話 赤羽町編（王子区 いまは北区）その 4

縁 日

縁日はお寺だからお祭りとはいわない。でも、お祭りと同じで楽しみだ。この日、父はよほどのことがないかぎり早めに帰宅する。

夕食を済ませると耕太を連れて出かける。夏は二人とも浴衣だ。

秋になると月が昇っている。「出たでた月が まあるいまあるい まんまるい 盆のような月が」父が歌いだし、耕太も歌う。

寺では仏像の前に蝋燭を百本くらい灯す。二人は手をすり合わせて拝礼する。それから夜店を歩くのだ。幅 5・6 メートルほどの歩道には夜店がぎっしりと立ち並ぶ。どの店もアセチレンを灯す。アセチレンの匂いは、夜店の賑わいに合う。酔うような一種興奮を醸し出している。本当は焼きそばが食べたいが、おなかはまだすいていない。

どんどん焼きもおいしそうだ。おもちゃは、何かしら一つは買ってもらえる。塗り絵や兵隊将棋を買ってもらう。名前はわからないが

面白く遊べるお気に入りのおもちゃを買ってもらったこともある。

父に何か買ってもらえるのが楽しみだ。中でも、綿あめは定番で、ほぼ毎回買ってもらった。

原っぱ

東京には「原っぱ」と呼ぶ広場（いわゆる野原）が、あちこち点在していた。原っぱはかっこうな子供の遊び場だ。

正月には凧あげで賑わう。春は駆けっこ。女の子は花摘みだ。

夏から秋はとんぼとり。そして昆虫採集だ。冬は駆けっこや鬼ごっこで、汗が出るほどに駆け回るのだ。

物売りの声

朝6時ころ目を覚ますと「なっとなっとなっ」との納豆売りの声がきこえる。納豆売りは自転車で来るのだ。藁筒に入っていた。母は時々買っていた。一番ポピュラーな売り声だ。夏が近づくと「金魚売」だ。

「きんぎょーえ きんぎょー」が売り声だ。耕太は買ってもらった。金魚鉢は前からのものがある。ただ、餌の用意が大変だ。金魚用の餌は売っていなかった。次にラオヤだ。ラオとは煙管（きせる）の中ほどのタケ筒のことだ。甲高い音で蒸気を吹き鳴らすのだ。煙管は刻みたばこ用だ。たばこのヤニで詰まっているのを掃除する。父は煙管を使っていなかった。

紙芝居

日曜日になると紙芝居がきた。大太鼓を鳴らしてふれあるく。

子供たちは駆け足で集まる。水あめを売る。小父さんは棒に飴を絡めて子供に手渡す。子供たちは、飴をしゃぶりながら紙芝居をみる。

戦後になると「黄金バット」がかかり人気を博した。

第2話 赤羽町編（王子区 いまは北区）その5

おしんこ細工

器用な小父さんが、おしんこを手先を器用に使って兎や犬や鳥などの主に動物をかたどり、串につけて売るのが。呼び声はなくしずかにやっていて、子供たちは余りの器用さに歓声をあげる。

小父さんはリヤカーに道具を積み込んでやってくる。出来上がったものは藁つとにさして、飾り立てる。かわいらしくて見とれてしまう。

動物園とデパート

赤羽から上野までは電車で15分くらい。歩く時間を入れても30分弱でいってしまう。だから気楽に動物園に行った。大抵は母と一緒に。時には4時ころ行くことがある。園内は静かになっている。クジャクがこの時間には羽を全開する。夕方は、見たいところを効率よく回る。ゾウと猿山は必見だ。あとはライオンと虎、キリンとオットセイだ。

昼すぎ早めのときは、決まって松坂屋へ寄る。夏はクーラーがなかったから、かわりに氷柱があった。氷柱の周りに人が集まってハンカチを当てては冷やして顔などに当てた。こうして涼をとるのだ。

あとは天井に大型扇風機があって、ゆったりした風を送っていた。扇子は必需品だ。エスカレーターがあった。エレベーターは以前からあったがエスカレーターはまだ珍しかった。乗る時、降りるときは怖かった。めずらしい洋服のおばさんがいたから、よくみたら金髪のアメリカ人だった。周りがせいぜい2階建てだから、8階建てのビルは大きく見え遠望もきいた。

駄菓子屋

駄菓子屋は子供たちの人気スポットだ。ロウセキはここで買った。

メンコ、ビー玉、ベイゴマ、紙風船、ぬりえ、花火、ブロマイドなど子供の遊び品は、ほぼここで手にはいった。小遣い銭は一銭から五銭が標準だ。5厘は知っていたが、もう使えなかった。だから一銭が最低で、「一銭もらってパン買って」と子供たちは歌いながら女の子の顔を描いた。食べ物も多く、につき、飴玉、せんべい、キャラメル、ビスケットなどだった。駄菓子屋には50くらいの小母さんがいつも座っていた。小父さんを見たことはない。

三輪車と足踏み自動車

赤羽に越して間もなく父は三輪車を買ってくれ、つづいて足踏み自動車を買ってくれた。ちょうど売り出されたところで、羨ましがられた。だから、家の前だけで遊んだくらいで、子供たちの中まで乗っていけなかった。五歳の誕生祝に近所の写真館へ写真を撮りに行ったら、この自動車があって、耕太と一緒に写された。毛糸のセーターを着ていた。このセーター姿が「ゾウさん」を連想させ、耕太のあだ名になった。

第2話 赤羽町編（王子区 いまは北区）その6

おもちゃ

おもちゃで代表は積木だった。積木は、いろいろと形を積み上げていくので、創作に役立つ。また、いろは文字がかかれているので、字を覚えるにも役立つ。ただ、5歳になると欲しかったのは、ブリキのおもちゃで、特に自動車、それから汽車と電車だった。それも、ゼンマイで動くものだった。それぞれ一つは買ってもらったが、うれしかった。変わったものでは、戦車（タンク）だった。動かすと、パチパチと銃が火を噴きながら走った。

女の子は、お人形さんごっこだったが、セルロイドのキューピーがはやっていた。ままごとと一緒に遊んでいた。ままごとは、男の子も呼ばれて混じってやった。外で、遊ぶときはごぎを敷いて遊んだ。お医者さんごっこもよくやった。

ゲームやカルタ

軍隊将棋が売り出され、ダイヤモンド・ゲームが出た。以前からあったのは、いろはかるた・すごろく・お祭りの出店では福笑いが売られていた。炬燵にはいると、しりとりをよくやった。それから、なぞなぞだ。変わったところでは、影絵だった。きつねや船頭さんは定番だった。炬燵は置炬燵と掘り炬燵があった。掘り炬燵は足が投げだせて、ゆったりするので、楽しさが倍加した。

クリスマス

クリスマスはサンタクロースが楽しみだ。寝るときは枕もとに靴下を置く。そして朝を楽しみにしているのだ。

当時、一般家庭の煙突は風呂釜から出ている煙突で直径15センチ程度の細長いものだから、サンタのおじさんは、どこから入ってくるのか心配の種だった。

さあ、朝めざめた枕元の中身は何か、それは靴下には収まらない積木だった。耕太は「おかあちゃん、サンタさんに会ったの」と聞いた。「会ったよ。耕太がいい子になるようになっていったよ」といった。

火鉢

火鉢は部屋の暖をとるだけでなく、お湯を沸かし、煮物までする。火鉢には炭を使うが、練炭は優れものだった。朝、火をつけて火鉢に入れれば、ほぼ終日火が絶えないで、煮物など、ゴトゴトと煮たり、温めたりできる。豆炭があったが、これは使ったことはなかった。

ディズニー・キャラクター

耕太が物心ついたころは、ミッキーマウス、ポパイ、ベッティーなどは活躍していた。耕太は3歳になったころ近所の女の子をみると「ベッティーさん」と呼んで「アラーツ」と顔を隠された。

日本では「しょーちゃん」「ふくちゃん」「のらくろ」「タンクタンクロー」「ダン吉」などに人気があった。町には「しょーちゃん帽」が出回った。

第2話 赤羽町編（王子区 いまは北区）その7

新聞配達

新聞配達は手紙と一緒に郵便受けに差し込んでいった。配達夫は駆け足で回っている。新聞紙を指でピュッと鳴らすのがかっこいい。当時父は「東京日日新聞」を取っていた。いまの毎日新聞だ。

母の実家、杉戸では「読売新聞」だった。週刊誌は、たまに「サンデー毎日」を買ってきた。母は「主婦の友」だった。毎月配達されていた。

郵便受の脇には牛乳受けがあった。牛乳が一本配達された。15年の中ごろに配達は終わった。

足踏みオルガンと蓄音機

20数軒あった隣組に足踏みオルガンを持っている家は一軒だけだった。このうちは父同士が友達だったから親しくしていて、よく遊びに行った。5年生の女の子と1年下の男の子がいた。オルガンは羨ましい存在だった。母が耕太にも買ってあげたいと言ったが「男の子は音楽など必要ではない」と断固としてはねつけられた。ただ、父の友達が上海帰りのみやげだといって、ハーモニカをくれた。だが、せっかくのハーモニカも吹き方をコーチしてくれる人がいなくて、勝手に音を出しながら遊んでいたに過ぎなかった。この家には蓄音機まであった。童謡のレコードが何枚かあって聞かせてもらった。どちらも耕太には高嶺の花だった。

蓄音機はもう一軒の家にあった。その家は隣組のちょうど真ん中にならって、小さな家に小母さんが一人住んでいた。子供好きの小母さんだったから、みんなの遊びの中心になっていた。廊下の前の庭に子供が集まると小母さんは童謡レコードをかけてくれた。「キューピーさん」（どんと波 どんときて どんとかえる）では、女の子が5～6人そろってダンスをした。男の子は指をくわえて視ていた。

相撲

大相撲が始まると、子供たちは、めいめい番付表を手にして、小母さんの家に集まった。小母さんはラジオの実況放送を聞かせてくれて、みんな星取表に勝敗を書き留めた。双葉山と男女川が全盛のときで、照国や前田山が活躍していた。

父は両国国技館へ連れて行ってくれた。駅近くの回向院の隣にあった。戦後は日大講堂になり、国技館は蔵前へ移り、60年頃現在の両国駅脇（元国鉄用地）に移った。

一方、子供たちは相撲で遊んだ。星取表を作り、彦名まで付けた。耕太は、前田山だった。張り手が得意だったからだ。小母さんの家の脇道に口ウセキで土俵の円を描いた。6年生の子がリーダーで親方になった。

花摘み

女の子は、原っぱへ花摘みに行く。耕太も誘われていった。クローバーが一面に咲いていて、これで首掛けや肩掛けを編んだ。

耕太は首掛けを掛けてもらい、思わず微笑んだ。

「花摘む野辺に陽は落ちて みんなで肩を組みながら 歌を歌った帰り道・・・」 誰か故郷を想わざる 霧島昇の歌がヒットした。父がたまたまステージを見て感激し家に着くなり歌いだした。

花摘みの帰りは、きまって歌を歌いながら家路に着いた。

第2話 赤羽町編（王子区 いまは北区）その8

線香花火

線香花火は駄菓子屋で売っていたので、気軽に買ってきては遊んだ。夏の夕方は浴衣になって、花火は男の子も女の子も一緒になって遊べた。なぜか縁側が多かった。パチパチと火花を散らし、燃え尽きる寸前に火の玉となって、ほろりと落ちるのだ。縁側の情景に似合っているが、30センチくらいの筒状の打ち上げ花火もやってみたいと思った。

アイスクリーム

甘党の父はアイスクリームがめっぽう好きだ。歩いて5～6分の赤羽銀座にその店はある。耕太はお使いを頼まれた。アイスキャンディーも売っていたが、アイスクリームに決まっていた。アイスキャンディーを横目でみながら、アイスクリームを買ってきた。いまのソフトクリームと同じだが、お皿状の容器に盛られ、蓋がついていた。溶けないように急ぎ足で帰った。

ボート

父はボートを漕ぐのが好きで、徒歩20分くらいの荒川へ耕太とでかけた。荒川は父の実家である吉見にも流れていて、秩父を発して埼玉県の中心部を流れ、東京に入ってから、隅田川の支流をもっている。愛着のある川だ。

墨田川のボートも思い出深い。父と母と耕太の3人連れで浅草へ出かける。観音様をお参りすると、隅田川に出てボートに乗る。時に大型のポンポン蒸気船が来る。すると高波が押し寄せてきて、この間父はオールを休める。時に鷗が飛来する。川からの眺めにひときわ高く見えるのが松屋百貨店だった。

百貨店（デパート）

やはり百貨店で買い物は楽しいので、母に連れられて行く。

多いのは動物園のかえりに上野松坂屋（御徒町駅近く）へ立ち寄った。

次に新宿伊勢丹だ。赤羽から池袋線に乗り、池袋で山手線に乗りかえてすぐだ。

新宿には鉄道病院があって、何かというところの鉄道病院へ行った。

その帰りに寄ることが多かった。池袋は乗換駅ではあったが、見るところはなく下車したことはなかった。とにかくいまの芸術劇場方面は広大な原野で、ガソリンタンクが2基ほどあった。

線路柵のところに木造平屋の鐵道官舎が3軒ほどあって、子供が柵の処で遊んでいた。ただ、西武線や東武東上線が入っていて乗換駅だったから将来の発展性は見せていた。

そして浅草松屋である。規模では一番大きい。屋上を見上げるとケーブルカー走るのが見えた。屋上は子供遊園地になっていて、さらに5階にも子供の遊び場があり、いろいろな遊戯施設を備えていた。

なかでもビックリするのが風神雷神だ。それからボールを鬼のお腹にぶつくと大きな唸り声を発して手に持つ金棒を振り上げる。驚かされた。

4番手は日本橋高島屋だ。冷暖房が完備していて、氷柱はない。屋上にお猿さんの檻があって、子供が寄り添うに見ていた。ある日、いたずら猿が小さな子の帽子を網から手を出して取り上げてしまった。猿は帽子を手にして岩の上に登って、泣く子を面白半分に見ていた。

第2話 赤羽町編（王子区 いまは北区）その9

おつかい

TV番組で「はじめてのお使い」というのをやっている。3歳にも満たない幼児がおつかいに出される。危なっかしいが、けなげな可愛らしさがある。ただ、番組では、カメラマンなど監視がついているから親も安心してられるが、全く一人となったらそうはいかない。実際にそういった幼児を買い物に出す親はいなかろう。

耕太の場合は、4歳後半頃だ。それもハガキを郵便ポストに入れてくる簡単ものから始まった。志茂で1回だけの経験を覚えている。3軒ほど先のポストへ行った。

赤羽へ行って5歳になると、頻繁に頼まれるようになった。日曜日に父からハガキの投函を頼まれるのだ。120メートルくらいの距離で、普段よく歩いている道だから迷ったりはしない。ポストは円筒型の赤塗のもので、今でもたまにみかけることがある。

5歳になるとお使いは徐々に増えてきた。郵便局でハガキを買ってくる。それから乾物屋で二、三買い物する。寒天と小豆でみつ豆を作った。6歳になつての夏、氷を一貫目頼まれたのは重くてつらかった。

蛭狩り

夏の風物詩、蛭は赤羽ではめったにみられない。大宮の氷川神社まで行った。本殿前の池である。池のほとりで採っていたら、父が足を踏みはずして池に落ちた。幸い淵の処で膝を濡らした程度ですんだ。深みまでいったら大変なことになった。

虫籠に入れて帰り、夜は蚊帳の中に5匹くらい放して寝た。鼻を近づけると、蛭は意外と臭い。戦時中に顔にぶつかってくるほど異常発生したことがあった。

てんのうさま（杉戸町の夏まつり）

てんのうさまは夏の大きな楽しみだ。おばあちゃんのいる母の実家へ、祭りの前日に行く。陽の高いうちに風呂に入り、シッカロールをぱたぱたと叩くよう背中や腹につけてもらい、浴衣を着る。目の前は日光街道だ。軒先に幾つか椅子を並べ団扇であおぎながら御神輿の来るのを待つ。頭の上の軒先にツバメの巣があるが、この時間には静かだ。

やがて御神輿が鉢巻きに半纏姿の男に担がれて、威勢のいい掛け声で近づいてくる。心臓が呼応して高鳴ってくる。店の前で景気よく揉み合う。はず向かいの家でも揉み合う。そして徐々に遠ざかっていく。その後に来るのが天狗様のお通りだ。家々の前で人は直立になって頭をさげ天狗様のお祓いを受けるのだ。耕太一族の前でもお祓いをした。眼光するどく、異常に高い

鼻の真っ赤な異形は恐ろしく耕太は緊張して、去っていくのをじっと待った。行ってしまえば、こっちのものばかりに、また従妹たちとはしゃぎまわるのだ。

第2話 赤羽町編（王子区 いまは北区）その10

餅つき

餅つきもまた、年中行事だ。ただ、都会ではほとんど餅つきは見られない。田舎の標準家屋は台所の広い家が多く、餅つきがしやすくなっている。赤羽にいたときは、両親の実家や、親戚、知人から送られてくるので、これで十分間に合うのだ。

耕太が5歳の時の、杉戸での餅つき風景は典型的で印象深い。

つく人、のす人、ふかす人の連携で成り立っている。この3者がうまく呼吸をあわせることが肝要なのだ。調子がそろっているので、みても爽快な気持ちになれる。そこには臼で杵を使ってぺったん ぺったん衝く人に、手に水をつけながらこねる人の息がぴったり合っていないてはならない。調子が乱れれば、練る人の手を打ってケガをさせてしまう。だから、みんなそろっての連携プレイだ。

打立ての餅を、まずは手のひらで、団子状にまるめて、餡子にまぶすのが、あんころ餅。これが待ち遠しい、美味しく楽しみながら馳走になる。あんころ餅は、この瞬間しか食べられない。そこに価値がある。

戦後、中学生のとき、我が家で餅つきをやった。耕太はつく人をやった。勿論楽しみな、あんころ餅をたべた。

紀元二千六百年

昭和15年は、邦暦紀元二千六百年である。日本はこの年を盛大に祝って、大祝賀会を全国的に展開した。父は鉄道省の大臣官房へ転任したところで、宮城前の祝賀会に招待された。明日がその日という夜にとんでもないハプニングをしでかしてしまった。母の招待券を耕太がうかつにも破ってしまったのだ。母が入浴している間に、耕太は一人茶の間で紙飛行機を飛ばして遊んでいた。鏡台の上に置かれた招待券の意味が分からず、破いてしまったのだ。母の「あれっ！」という叫びにも似た声に、びっくりした。事情を聴いたが、後の祭りだ。

母も言わなかったのは落ち度というわけで、和解した。

結局、当日は父だけが式典に出た。母と耕太は上野駅で時間を決めて待ち合わせをした。上野広小路には浅草発の花電車が夕刻暗くなったころ通るのだ。父が見えるとそろって広小路の中ほどにあるすき焼き屋へ行った。ここも満員でやっとの思いで座れた。

駅へ行くと、これを見ようという、群衆が押し寄せていた。そして、世紀の花電車を見ようと、日の丸の小旗と提灯を手に、いまかいまかと高まる期待感で熱気が立ち込めていた。花電車の影がみえたとともに「来たぞー」と声を張り上げた。大人でも無邪気なものだと思った。2両連結の花電車が、こうこうと光り耀いて走っていく。

そして去ったかと思うと、次の電車がやってきて、歓喜の声は一段と高まった。二つ目が行ってしまおうと、「ほーっ」と大きなため息になった。旗を振る手を休めて茫然とした空気が一瞬襲った。興奮状態が収まると一斉に引き上げた。駅の階段は身動きが取れないほどの混雑さだ。父は羽織で下駄履きだ。その下駄の鼻緒が切れた。一瞬困った父は元いた職場、駅内にある上野車掌区へと下駄を片方手にして行った。室内に入ると顔なじみの助役さんが二人いて、応急にすげ替えをしてくれた。

第2話 赤羽町編（王子区 いまは北区）その11

交通機関（乗り物）

人力車

赤羽駅の前にはいつも客待ちの人力車がたむろしていた。

家までは徒歩12分くらいなので利用したことはなかったが、一度だけ父と一緒に乗った。大きな車輪で、乗ってみると高さがあって、見晴らしがよく、乗り心地がよかった。車夫は半纏姿に脚絆といった今も変わらぬいで立ちだ。家の門の前で降りるときは、ゆったりした気分になっていた。いまは浅草などの観光地にたまに見かけるが、人気があり、外国人にも受けている。

輪タク

人力車の自転車版だ。しかし、人力車の風情がない。カッコいいところはみられなかった。戦後は人力車をしのぐ勢いで増えたが、5年ほどで惜しまれることなく消えていった。

円タク

タクシーであることに変わらない。都会を走るタクシーは、一律一円で走った。小型タクシーの気軽さが受けて、円タクばやりになった。しかし、いつかの時代で終わった。あの頃の世相を表している。

車の燃料はガソリンだ。排気ガスが鼻をついたが、悪い匂いではない。どちらかといえば好きな匂いだった。昭和18年にはガソリン車はなくなって、残ったトラックは木炭にかわった。木炭を荷台に積み込み、ボイラーに放り込むようにくべていた。夢も消えていった。

バス・乗合自動車

バスが、次第に乗合自動車といわれるようになった。2年生の国語の教科書では乗合自動車だった。バスのほうが簡単で、バスの名は相変わらず使われた。局端に減ってきたとき、新たな馬車が出現し主に地方でみられるようになった。馱者がラツパで合図していた。その音がトテトテと聞こえるのでトテ馬車と呼んだ。耕太は杉戸駅でみた。関宿街道を通過して関宿まで行っていた。

チンチン電車

と呼んでいた。市内電車だ。路面電車とも呼んだ。発車に際し車掌が紐をひくとチンチンと合図音が鳴った。それでチンチン電車と呼ばれた。赤羽は終点で、王子方面の始発の停留所だ。ホームが一面あるのみだ。たったの一両で走っていた。王子へ行くには省線のほうが早い。だからたまに途中で用事があるとき乗る程度だ。大きな火鉢を買いに行ったとき、兎を買ってきたときもあった。兎を二羽だ。

飼ってみたものの、餌にする草が、不足でつい豆腐屋でおからを買ってきて餌にした。どうしても水分が多くなり、早死にしてしまった。

幼稚園があって入園させたいと父は思い耕太を連れて行っては見たもの、隣組では行く子がいなくて、結局やめた。今と違って、幼稚園に行く子は少なかった。

自転車

自転車は輸送というには当たらない。ただし、リヤカーは物の運搬に使うので、小型輸送車だ。当時、自転車はほとんど見かけないほど少なかった。少量運搬は、馬が多く、たまに牛が荷車を引いていた。

トラックはさほど普及していなかった。

鉄道

鉄道は大型輸送機関だ。汽車と電車に大別される。ただし、戦後の一時期、気動車（ディーゼルカー）があった。

赤羽は高架線で京浜東北の電車があって、平地は東北線の汽車があり、その先に池袋行の電車があった。編成は6両、池袋行は2両だ。

父の実家、母の実家へ行くには、どちらも汽車だ。汽車は蒸気機関車がけん引する。その蒸気機関車のデッカイこと。ド迫力には驚きと感激だった。いまも人気を保っているのは、この迫力だ。そして、ポーと鳴り響く警笛だ。この警笛音も魅力だった。汽車は童謡唱歌の対象になっている。一方電車も子供には好かれている。「電車ごっこ」（運転手はきみだ 車掌はボクだ）の歌は、子供の遊び歌だ。紐を輪にして電車に見立てて遊ぶのだ。

第2話 赤羽町編（王子区 いまは北区）その12

ラジオ体操

ラジオ体操は昭和3年にはじまったが、その後第二が出来たりして進化し、昭和14年に国民皆健康体操の形で徹底が図られ、隣組がこぞって行うようになった。日曜日の朝、集合場所は耕太の家の前になった。

はばかり

はばかりとは、便所のこと。便所ははばれるので、はばかりといった。また、ご不浄とは女性がよく使ったいいかただった。戦後になってトイレが一般的になった。WCという掲示もみたことがある。

一般家庭の便所は大小二つが備わっている。耕太の家の場合は家の片隅にあって、扉を開けると小便用があって、大便是右手に扉あって、そこを明けて入る。腰を下ろす型で、当時は洋式の腰掛式はなかったとっていいほどで、耕太は見たことも聞いたこともなかった。壺がいけてあって、その壺に落とすのだ。壺はほぼ一杯になったころ汲み取り屋がきて、勺で汲んでいく。汲んだ汚物は樽に入れて、持っていく。リヤカーに幾つかあって、運搬していた。

汲み取りが終わったあとは、しばらく匂いが立ちこめている。換気扇はおろか脱臭装置などない時代だった。用がすんだら手洗いであるが、この場合、手水鉢（ちょうず）を使う。あるいはバケツのようなものが吊ってあって、ノブを押すと水が流れ落ちてくる。その水で洗うのだ。紙はB5くらいのもので、便所紙として売っていて、これをつかう。

紙入れというか紙置きがあってここに置いて使う。

銀座

銀座は日本一の繁華街、しかも高級感がある。そうしたことは、5歳の耕太も承知していた。だから、両親に連れられて行ったときは胸をときめかせていた。

とはいっても、街並みは全体的に木造二階建てのお店が軒をつらねていたといったところだ。だから、高いビルはやたらと目立った。

銀座の中心4丁目は尾張町の服部時計店。向かいの三越。3丁目の松屋、5丁目の松阪屋といったところが8階建て高層で群を抜いて目立った。歩道は柳の並木で、そこには、露店商が肩を並べていた。

父は何を思ったか、蛇のおもちゃを買った。竹製のものが出回っていたが、ここで紙製の精巧にできていたものを買った。7丁目に資生堂パーラーがあった。ちょうど夕食の時間だったので店に入った。天井が高く電灯ははなやいだもので、さすが普段はお目にかかれない高級レス

トランだった。女給（ウエイトレス）は、半そでの洋装制服で、前掛け（エプロン）姿だ。注文をとりにきたそのとき、父はふところから、今買ったばかりの蛇を取り出すや、女給さんの目の前へ突きだした。よほど驚いたのか、女給さんは「キャー」と叫ぶなり卒倒してしまった。周りのお客は騒然として立ち上がった。母は赤面してうつむいてしまった。その異常な物音に、店の主任さんが飛んできた。父はただ、平謝りに謝り続けた。全く予期せぬ出来事が起きたものだ。銀座でのなんとも言えない思い出になった。その後、それほど精巧な蛇のおもちゃは目にすることがなかった。

本シリーズ完